

かった。三島さんが自身で採りあげた題材をどのようにこなしたのか知らないが、胡蘭成さんは「英霊の声」と「憂国」をとりあげて、「英霊の声には、自我主義の傲慢の膨張ばかりである。天皇もこのわれに対し責任の存在でなければいけない、というのである。これと「憂国」の二篇の作にあるのは、葉隠の気狂ひ武士道とニーチェの超人主義と戦後肉欲の享楽主義とをかき混ぜたもので、暗いすさまじさが人の肝を揺り、日本民族の天地開闢の優しい柔らかさ、いたづらの喜びが全然ない、悪札である」ときめつける。そして、「白楽天と蘇東坡の詩は、憂患を解脱し、詩の詩たる嬉しさがある」という。三島さんの「文章読本」に目を通したくらない門外漢の私は、三島文学の真髓にふれて、いま、とやかく云う立場にはないが、千年の歴史のふるいに耐えた、白楽天や蘇東坡に比せられたのでは、いまの日本の文学―特に肉欲を身上とした売文―は、ひとたまりもないにきまつている。

三島さんは、うちの水道橋店開店以来のご常連の一人で、生醬油で肉を焼かせ、西洋流のソースや特に大蒜を甚だ嫌う。この見識はたしかに高く、肉本来の味を失わないということ、私もそれに共鳴して、焼肉は三店ともテリ焼としてしまった。こうなると、肉の吟味に力を入れないと、それだけのうるさ方に見破られる恐れがある。これを一般では苦肉の策によって切り抜ける努力をするのだが、うちでは、料理の門外漢だけがたづさわっている素人料理だから、特別な方

式を採らず、材料の吟味だけに猪突猛進している。私はこれを二首六身の商法と名付けて、我が家の遺法とするつもりでいる。

およそ、商売でも文学でも、また戦争でも革命でも、二首六身のような戯れの気が漂わないと、面白くない。二・二六事件は称び方としてはそれにあやかるものであるが、一九一年の辛亥革命のようにピタリと二首六身にあて嵌らず、孫逸仙のような解脱した仙人はあの中には見当らなかった。「汨羅の淵に波騒ぐ……」という、屈原の憂患を歌った二・二六事件の歌も、また、当時唄いなれた「有色の屈辱のとも喘ぐ者……」の垂細亜の歌も、ともに悲壮と憎しみが露骨で、明治維新の「宮さん、宮さん」の歌のような、土俗の瓜蔬(かそ) (瓜と野菜)の素朴な気がない。辛亥革命の土民軍は詩の国風(周の詩経の中の地方民謡)の調に乗って進んだ。二・二六事件にその気が乏しかったのは残念に思う次第である。われわれ歩一の兵隊は事件後の満洲で、「秩父音頭」を歌い、わが戦友・火野葦平軍曹は、徐州会戦に、お国訛りの「おけさ節」を兵隊たちに唄わせた。

われわれ日本人の舌覚は世界に冠たる由だから、食べ物に、日本趣味を尊ぶのに私もやぶさかでないが、儲を棚上げして、専ら、肉や材料の吟味に努めているかつ吉の常客が、戦後外国からまぎれ込んだ「肉欲」を、すさまじい売り方をしているというのでは、私も商売柄、黙視するわけにいかず、

旅から帰ったら、さっそく、現代の文豪といわれるノーベル文学賞候補の三島氏に会って、篤と話を聞いてみたいと心にきめるのだった。その際、佐藤一斎の二首六身詩を呈上し、なお縁あらば遊記山人に引き合わせ、更に許すならば、日本を自国の如く愛する胡蘭成大人との間に橋をかけたと思うのであった。窓外の月はいつしか西に傾き、明け易い太平洋の朝が白んで来た。

この旅から帰国してから、何回も水道橋の店で三島さんの顔を見た。私は、深々と新聞で顔を埋めている文学者の三島さんに、門外漢のわれわれが、いやしくも相手の飯の種のことに関して意見を陳べることが、現代の日本では内政干渉、ひいては営業妨害となる気がしてならなかった。その逆に、われわれ土俗のつくる料理に関する客の批評は自由勝手、切捨御免なのだから妙だが、これは文学者に限らず、書家でも画家でも、学者でも、医者でも、いやしくも「先生」の尊称をもって呼ばれる文化階層に対しては、日本では不文律の掟となつている。

そんな遠慮もあり、また下世話に云うならば、それをしたから一銭の得になる訳のものでもないで、いたずらに目を曠しくしていると、秋が来て、川端さんがノーベル賞を受けられた。さっそく、山水楼に行くこと、

秋の野に鈴鳴らし行く人見えす  
の受賞感懐の句が壁に懸けてあった。私はこの句に遇って、

はなばなしく報道陣に取り囲まれている川端さんが、巡礼姿に身をやつし、ご詠歌をうたい、鈴を振って、西国三十三所の観音霊場めぐりに逃避して行く姿を思い浮べた。

いっぽう、食事がおえて帰った三島さんの席から、空の葉巻ケースを拾っては、ノーベル賞のゆかりと思っていた店の連中は、それが、毎度ごひいきの三島さんからそれて、縁もゆかりもない川端康成氏にまわったことを心外に思ったらしい。私は、巡礼の川端さんには、観音さんの御利益で、野鈴が授かったのだ、と、秋の野の句を示して、彼等の得心を促した。「ああ、そんなことがあるんですか」と彼等はうなずくのである。

そこで急に、店の連中のなかに「伊豆の踊子」や「雪国」の愛読者がふえて来て、「本屋に売り切れなんです、おやじさんのところにありませんかね」などと云って来る。「俺はノモンハン事件の頃、兵営で雪国を読んだが、みな焼けてしまった。いまに沢山刷られるよ」と云って待たせているうちに、遊記山人の題字になる「川端康成自選集」が出版され、これを宮田さんから頂戴した。

その頃、泉岳寺の高台に白木ぞっきの観音堂が建ち、宮田さんが昭和のはじめの頃から護持し続けた救苦救命の菩薩像景徳鎮白磁着彩の慈航観世音尊像がその中に安置された。川端さんは宮田さんに、感懐をこめて、「有由有縁」(由あり縁あり)の句を贈り、宮田さんはよろこんで、この書を境内の



川端康成氏書

石に刻りつけると云って走りまわった。

私は、ノーベル賞のお祝を兼ね、いままでの終始かわらぬ御賛助の御礼として、この際、何か心ばかりの贈り物を川端さんに差上げたいと、宮田さんに相談をかけた時、宮田さんは、「川端さんは亥の年だから、いつかの二首六身詩がいいだろう。それにしてもあと三年ばかり待って、昭和四十六年(亥年)の正月に、川端さんの七十三歳の亥寿を祝って、贈るのがよからう」というのである。私が思うに、それではノーベル賞のお祝いを兼ねる意味が消えてしまうのだが、ともかく、宮田さんの意見に従うことにした。この詩は、いくら二首でも六身でも、分割する訳にはゆかず、とうとう三島さんに上げるのは断念したのであった。

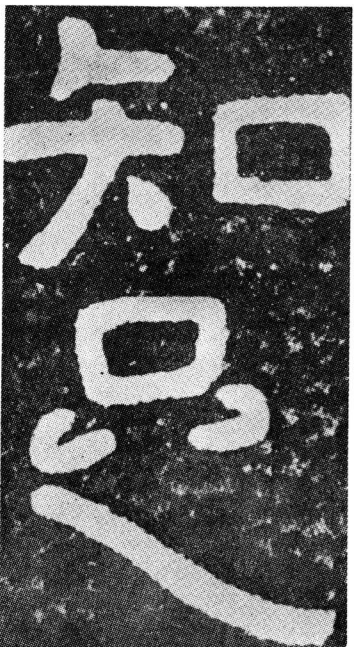
はる。御礼の徴志として、書幅その七絶を書きて。四十六年正月、川端康成」。まことに鄭重で、恐縮した私は、身のひきしまる思いがした。

一斎老人は、

物、所を得れば是れ治となり、事、宜しきに乗けば是れ乱となること、猶お園を治むるが如き也。樹石、置を佐けて、その恰好を得れば、則ち、朽株敗瓦またみな趣を成す。

と云っている。現今のご時世に、人の口の端にも上ることのない一斎の「朽株」が宮田さんの宜しき取り計らいによって、川端さんに所を得て、康きを成したことを、つくづくよかったと思う。いずれその朽株は芽を吹くことであろう。

泰山石経拓(六朝時代)

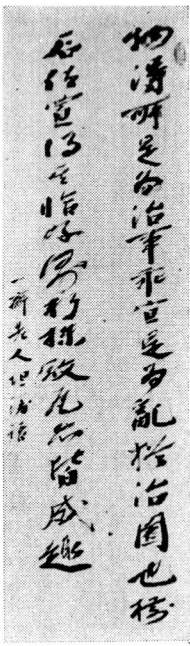


昭和四十五年になってからは、それまでは単身が多かった三島さんは、若い方々を大勢つれて来られるようになった。この年の五月に前記の三女が結婚し、その新婚夫婦に頼んで、ハワイから葉巻を一函買って来させた。二首六身詩のかわりに、これを改めて私から手渡しして、お近づきを願う、いろいろ語り合ってみたいと思っているうちに、時がたち、十一月二十五日、三島割腹の日を迎えてしまった。私は三島事件の取り沙汰の街を、一斎の幅をかかえて山水楼に至り、宮田さんに川端邸への托送を依頼した。

明けて昭和四十六辛亥の年の正月早々、宮田さんから電話があり、川端さんから大きな亥が届いているという。さっそく頂戴になると、亥の一字は泰山石経の字の大きさと、風姿もそれに通うものがある。私はその字を脂松の板に深刻りにし、岩緑で埋めて、三島さんが若い方々と好んで座られた席から正面に眺められる場所に飾った。新年早々、水道橋店に大いのしが飛びこんで来て、気をよくしている私に、川端さんはさらに一斎の二首六身詩を書いて下さった。宮田さんの十六葉もさることながら、川端さんの律義には深い感動を覚える次第であった。

その二首六身詩の賛には「一斎七十三歳詩、同年康成、辛亥正月孔雀朱毛筆書」とあり、箱の蓋表に「佐藤一斎七十三歳亥年七絶」、蓋裏に次のように書してある。「吉田吉之助氏より、わが七十三歳亥年正月に、一斎七十三歳亥年七絶を賜

佐藤一斎書



さて、その正月二十四日に川端葬儀委員長のもと、故三島由紀夫氏の葬儀が、築地本願寺で執り行われることとなった。新聞、週刊紙、テレビはいろんな取り沙汰をむし返していた。快晴にめぐまれたこの日、私は葉巻の箱をもって、会葬に臨み、受付で、お供を願い出ると、供物一切辞退の由で断わられ、焼香は長蛇の列に従うべきことを申しわたされた。長いことテントの横の椅子にかけて列の動き出すのを待ちながら、私はこんな瞑想にふけた。

二・二六事件で首の飛んだ栗原中尉など烈士の魂は、あれから三十五年たっても、いっこうに世情人心が改らず、かえって旧に倍した奇態を呈しているのを見て、「わが首を還せ」と、三島由紀夫氏に迫ったのにちがいない。それに対する三島氏の返答が割腹であり、首も飛んだ。

やがて三島の魂は、鎌倉の御輿岳の中腹の椎の木に、赤い人魂となってからみつき、人々が寝静まった月夜に、スーッと下りて来て、川端さんの家の雨戸を叩くだろう。次には、

京都大森の保田さんの家裏の池から、秋雨の夜に紫色の人魂がドロンと立ち上り、赤松の梢を伝わって戸の隙間から中に入る。その時の両和尚との問答を私は楽しみに待っている。

福生の胡蘭成和尚はすでに一喝を与えているし、私はおそろしく千喝も食わせているから、こっちの方には出ないだろうと思う。そんな妄想に耽りながら、これまで三島さんとは、いっとう縁が深まらなかったことを運命と思い、本願寺を巻いた葬列には加わらずに、心ならずも遙拝のかたちをとり、引き下って来た。この日、宮田さんと共に参葬することになっていたので、宮田さんは風邪気味で家族に引きとめられて出られなかった。この宙に浮いた葉巻は、何とはなしに、川端さんに受けとっていただきたい気がして宮田さんに托した。相手の好悪をも聞かずに差し上げたのは、「事、宜しきにそむく」ことになるかも知れないので、そんなことと、口上がわりの駄句についての弁解やら訂正やらの、お許しを川端さんに願って、「事、宜しきに叶うよう」念じながら、ここに筆を加えさせていたきたい気がする。

葉巻についての句「由なきも縁あるものを如何にせん」は「由亡きも煙あるもの……」と御理解を願ひ、途方に暮れた物の行方に一掬の泪を濺いでいただきたく思う。歳首大亥の出来についての「鎌倉を馳せて出でけむ初鰻」の二番煎じにて、「馳せ」は「長谷」の意なるのみにて、味の薄きところは何卒ご勘弁

を。一斎二首六身詩孔雀朱毛筆書について、御札の意をこめたつもりで、「六身が九尺の筆をもてあそび」と狂句したのは、たいへん不躰のように感じられますので、「六身が九尺の筆を軽くもち」と訂正させていただきたいと存じます。

縁というものは不思議なもので、長いこと同じ釜の飯を食べていた三島さんと私は深交にいたらなかったが、七年も来てくれた間に、店の者たちにとっては忘れがたい数々の思い出がある。一月二十四日の本葬から私が帰って来ると、その晩、五、六人の者が私の部屋にやって来て、三島さんの切腹について意見を聞かせろ、と云うのである。私は「若い者には、この話はよくわからないかも知れぬが、わかる話はすぐに忘れるが、わからない話を一生心に留めて居れば、年をとってからわかることもある」と前置きして、次の「三島の猫の茶碗」の話をして聞かせた。

明治の頃、東京駒込の町はずれに一軒のめし屋があった。道端に葭簀を立てかけ、それから覗き込むと、土間にいくつかの縁台が並べられてあり、縁台の上には筵が敷いてある。入口の縁台の上にお婆さんが坐ってポロポロと涙を流している。軒先からつき出た桜の枝は昨夜の風と雨で裸になっているが、時に風に乗った花びらが枝をはなれて舞い落ちる。午下りの日射しをうけて、お婆さんの膝の上に仔猫が丸まって寝ている。

すると、そこに客が一人、「ごめん」と云って這入って来

て、「お婆あさん、お酒を一本」と注文する。「ハイ」と云って立ち上るお婆さんの膝から猫が下りて、腰をおろした客の膝にのぼる。客が猫をさすって待つうちに爛がつき、「お待ちどうさま」と云って、徳利の盆が据えられる。二合徳利を独酌でやっている客が、つまみに出されたかくやの鰻節にたまげて、「この鰻節は、まるで勉強だ。すみませんが、その猫の茶碗をチョット取って下さいよ」と云うと、お婆さんが土



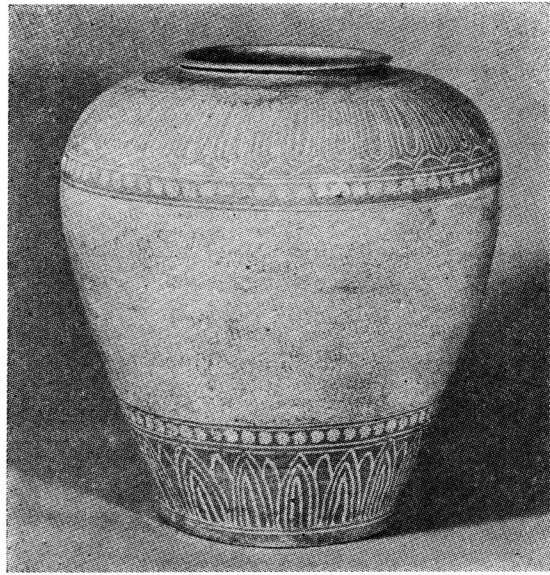
間、隅から猫の茶碗を取って出す。客は猫の冷飯の上に自分のおかかをつまんでかけて、また元の土間に戻してもらう。猫はそんなことには、いっとうおかまいなく、客の膝に眠る。ややあって、客が徳利を振って見、これを盃にしたみ、「お婆さん、飯にしようか」と云って、盃を口の方に向けて、そのとき、一片の花びらがヒラヒラと舞って来て、盃中に落ちる。浮いた浮いた、と手首を揺り、狼藉の偏舟に眺め入っていた客が、花びらを通した陽光が盃底に桃色の影を宿しているのを見て、「李朝の窯変が出た」と呟く。そして、「お待たせを……」と差し出された飯膳の片隅にこれを置き、視線を据えて、箸を取ろうとしない。

### 大天狗の函

茶をいれて来るお婆さんに、客が、「この猫は可愛い猫だね、お宅で生まれたの」と聞けば、「いいえ、そうじゃないんで、ご近所で生まれたんでしょ。まぐれ猫で、二三日前からそうしているんですよ」といふ。客が茶をとって飲み、改まった調子で、「この猫は戴けないだろうか」と云うと、「うう、お持ちになって飼ってやって下さいませよ」との返事。猫をふところに入れてきた客が、勘定

をすませて立ち上がると、お婆さんが、「猫をもらって頂いたのでは、鰻節の一本もおつけしなけりや」といふのを、客は手遮り、店を出ようとする。「まあ、チョットお待ちを……」というお婆さんに、客は、「それなら、さきほどの猫の茶碗をもらおうか」といふ。お婆さんが奥のお爺さんに、「お客が猫の茶碗をほしがってるよ」と、大声をかけると、奥から、「馬鹿いな、客に出した井をくれてやれ」との音声。

客は突嗟に「この極道」と、捨台詞を残して足早に去った。お爺さんが片手に大天狗（明治時代の口付タバコ）を、片手に茶碗酒を持って、台所から出て来、上り框に腰をかける。と、お婆さんが、「猫が帰って来ますよ」という。お爺さんが立ち上って外を眺めると、散り敷いた花の泥濘をよけながら、悠々と戻って来る猫の姿が見えた。



三島の壺（安宅コレクション）

文政十年亥年生まれのお爺さんは、当時、古稀は達していたと思われるが、口ぐせのように「俺は百半まで死なない」と云っていたそう。この人はどうとう、その念願を果たし昭和のはじめに大往生をとげた。人世に稀な長生きをしたお爺さんのお通夜の晩には、葉桜の枝から忘れたように花びらが舞い落ちる縁先で、茶碗酒が酌み交されていた。爛徳利を膝におとし、お酌を忘れたお婆さんの思い出話は、

『この仏様は面白い人で、たびたびまぐれ込んで来る捨て猫に名前をつけては、黒猫のクロちゃんには天目の茶碗、曲猫のシロちゃんには李朝由磁、三毛猫のミケちゃんには唐土彩、きつねのキイチちゃんには高麗刷毛目、というふうには秘蔵の茶碗で飯を食わせていました。ある時、灰色のおち猫がやって来たとき、「婆さん、この猫にはどんな茶碗がよからうか」と云うんで、「わたしや三島が似合うと思うが……」と云うと、このおち猫に三島手を出しました。その時に三島を貰いたいと云うお客ができ、三島の茶碗も一緒にくれる、と云うんです。お爺さんはその客をメクラと思ひ、大声で喝をいれたつもりが、相手はメアキで、逆に極道と仕返しをして行きました。猫を途中で棄てた客は、後に猫の小説を書いて、添手紙をつけてその本を送って来ました。その手紙に「……客の井といわれた時、コン畜生と思ひ、つい暴言を吐き、くやしさをあまり猫を途中で棄てた。物陰にかくれとでもいふやがたら、只でおお分なかつた。と云うていました。」

私の花 堵した。その時の安心が一生忘れられない安神になりそう玉川「だ」と書いてありました。それに引きくらべて、うちのお爺 菩提樹さんは、とうとう生きているうちは安神とか成仏というところまでは行きつきませんでしたね。

若い時は岩村藩の武士で、極道の仕方題。江戸へ出てから佐藤一斎先生の門に入り、長い間、昌平齋の下足番を勤めていました。一斎先生の犬のお氣に入りで、あの軸なども先生に書いていただいたものです。先生は米寿で亡くなられましたが、口ぐせのように、僕は百半まで生きる、と云われ、それがこの人にうつつたのでしようか、いつも百半が口ぐせでした。おかげさまでこのように長生きが出来、いまごろ地獄で、いえ、あの世で先生にお会いして、「師の念願を代っ



川端康成氏書

て果して来ました。この通りに」と、両手を挙げて、パンザイの恰好で、大威張りでしようよ、ね」というものだった。その晩、親しかった老和尚がやって来て、こんな戒名をつけた。

六身院三首亥道居士  
お爺さんの辞世の句は、  
散る花も三島も猫も夢の中  
（註）三首六身は三六六〇、これは百歳半にあたる。三島は朝鮮の李朝初期（一四〇〇頃）に南鮮の鶏籠山窯で焼かれた陶器で、器面の一部または全体に、こまかい花文などを印花の手法でびっしり押し、これに白土をぬりこんで、透明釉をかけて焼き上げたもの。

むかし鶏籠山窯の徳利が山水楼の座敷に飾ってあった。これを店に飼っていた虎猫が割ったことがあった。宮田さんはその時、たいしてくやしい表情をしていなかった。そういう点で、駒込のめし屋のお爺さんと、あまり変らない極道のところが見える。今年、三首に達したばかりの宮田さんは、あと六千六百六十日生きなければ、三首六身にならない。現今は昔とちがって人の寿命が延びているので、お爺さんにヒケをとらないように頑張ってもらいたいの、われわれの願

いである。最近に刷って出された「竜鱗八十一首歌集」にある和歌は、いちいち肝に銘じるものばかりである。上來引用の歌はそこから採ったものだが、その返歌の意味で、私は

次の二詩を作った。これも胡蘭成さんの助けを借りたものである。

◎戯れに李義山の詩に倣いて、遊記山人に題贈す。

山人、酒旆しゅはいを掲揚して五十年。人、三首空身の仙と称す。

日常、毫ふでを揮ふるい、其の居室中、丹書、堆たいを成す。多くの詩章を贈り、来訪の人に与う。

遊記山人、市塵しちんに老ゆ

機もてあそぶを忘れ筆を弄よぶ世長よながき春

顧客、年とし歳を詢とうを勞せず

二字にふたご竜鱗りゅうりんを書して人に与う

(註)酒旆は酒を売る店の目印の旗。三首空身は三万日のこと、つまり八十一歳がこれに当る。丹書は金石に刻りこむ文字。堆は小高い丘。竜鱗は竜のうろこは九く九く、八十一枚あるということから八十一歳。

戲あそ倣李義山詩、題贈遊記山人

山人掲揚酒旆五十年。人称三首空

身仙。日常揮毫其居室中丹書成堆。

多贈詩章与来訪人

遊記山人老市塵 忘機弄筆世長春

不勞顧客詢年歳 二字竜鱗書与人

◎佐藤一斎の二首六身詩に次韻じいんして、遊記

山人の心情を詠む。

魔界仏界、二界に非ず

三首空身、是れ逸仙

人生、元来失得なし

唯だ失得なければ、却って年を忘る

(註)次韻は韻をふむこと。逸仙は孫文の字でもあるが、解脫げだつの仙人をいう。



川端康成氏書

次韻佐藤一斎二首六

身詩、詠遊記山人心情

魔界仏界非二界

三首空身是逸仙

人生元来無失得

唯無失得却忘年

本稿は昨秋号のために寄せられましたもので、発行遅延のため、ついに今日の発表となつてしまいました。この間に、川端康成先生が御他界になり、はからずも、この文が御墓前一輪の供花と相成つてしまいました。ここに原文のまま印刷に附しましたが、当方手遅れのこと、作者並びに大方の愛読者に対し、深くおわびを申し上げます。(東京名物編集主幹 千賀富士男)